

# 知求会ニュース

2009年5月

第30号

## ◎ 博士前期課程、入学おめでとうございます！

2009年4月8日(水曜日)午後1時30分から宇都宮市文化会館大ホールにて、2009年度入学式が開催されました。学長式辞は宇都宮大学HP(アドレスは下記参照)に、掲載されています。( <http://www.utsunomiya-u.ac.jp/gakuchou/shikiji-nyugaku-21.html> ) 宇都宮大学HP

今年度の入学者は、国際社会研究専攻の第11期生 石井直子さん、叢 佩傑さん、高橋清人さん、館野治信さん、張 君雪さん、デ ドラボ イバザ セシル ルドピナさん、中山利之さん、ビー ジンさん、包 福德さん、苗 苗さん、楊 柳さん、呂 素素さん、和気徹也さんの13名と国際文化研究専攻の第11期生 荒井 満さん、賈 文瑾さん、加藤 映さん、チャイ フクオンさん、楊 逸如さんの5名、そして、国際交流研究専攻の第6期生 井戸田邦彦さん、角田亮子さん、加藤 靖さん、櫻井留美さん、佐々木弘恵さん、章 斯思さん、張 京花さん、范 喜春さん、半田昌弘さん、ムニヤル ニーラジさん、屋代英二さん、山下孝雄さんの12名で、計30名でした。

## ◎ 博士後期課程、入学おめでとうございます！

今春宇都宮大学大学院 国際学研究科博士後期課程に入学する 崔 寶允(国際社会研究専攻・第9期生)さん、仲田和正(国際交流研究専攻・第3期生)さん、芦 暁博(国際交流研究専攻・第4期生)さん 進学おめでとうございます。また新たな入学者に 今井淳雄(国際交流研究専攻・第2期生)さんの計4名が博士後期課程第3期生として入学されました。今後の研究成果に期待したいと思います。(博士録06を参照)

## ◎ 着任教員紹介その9

### 湯澤 伸夫 (YUZAWA Nobuo)

専門：英語音声学

前職：高崎経済大学

趣味：映画鑑賞

自己紹介：4月に国際学部に着任した湯澤です。宇都宮大学は3つ目の職場になります。研究分野は英語の音声で、英語の母音・子音やプロソディの特徴など、理論というよりはむしろ、音声実態を研究対象としています。具体的には、どのように発音されているか、どのような音響特徴があるか、どのように音を知覚するか、などを研究しています。研究対象の英語音は、基本的に標準英音と標準米音です。しかし、イギリス、アメリカ国内の

英語音はこれだけではありませんし、特にイギリス国内の英語音は多種多様です。他に英語を母語として用いているカナダ、オーストラリア、ニュージーランドの英語音にも独特の特徴があります。また、英語は第2言語や外国語としても世界の多くの地域で用いられています。こうしたいろいろな英語音の特徴もできる限り研究したいと思っています。

(2009年4月27日原稿受理)

### 高橋 優 (*TAKAHASHI Yu*)

専門：ドイツ語、ドイツ文学、ドイツ思想

前職：大学非常勤講師

趣味：読書、音楽鑑賞

自己紹介：「宇都宮」と言えば「餃子」しか知らないまま2009年4月1日に宇都宮大学国際学部へ赴任して来てしまいました。まだ右も左もわかりませんが、少しずつ栃木のこと、宇都宮のことを勉強しようと思っています。私は主にドイツ・ロマン主義の文学を研究対象としています。これまでは、ノヴァーリスという詩人を扱ってきました。未来へのあこがれ、永遠なるものへのあこがれを「青い花」に象徴的に表現した人物です。「青い花」は、ロマン派全体のシンボルになりました。理想を追い求めるロマン主義は、現実逃避をしているという批判を受けることがあります。しかし「青い花」は、終始あこがれのままなのです。ノヴァーリスが伝えなかったことは、大切なのはあこがれを抱きつつ「今」を生きることだということです。ロマン主義の研究は、「今」をどう充実させるか、「今」をどう生きるかという、人間の根本的な問題を考えるきっかけを与えてくれます。

(2009年4月21日原稿受理)

### 中山節子 (*NAKAYAMA Setsuko*)

専門：アフリカ地域研究 経済人類学

前職：研修員・非常勤講師

趣味：手抜き料理研究（餃子は粉から30分）、サッカー観戦、ダンス

自己紹介：知球会の皆様、はじめまして。5月12日から10か月間、阪本久美子先生の代替を務めます、中山節子と申します。研究テーマは、地域研究では南部アフリカにおける農村と都市の関係史を農村の視座から論じること、経済人類学では経済を場所づくりとして捉えたばあいの価値論の再検討に関心があります。フィールドであるマラウイ湖岸地域は、かつては奴隷、今は労働移動者の供給地として、拡大する世界経済へと人を送り続ける一方で、最貧国・低開発地域の立場に甘んじてきました。講義やゼミでは、湖岸の村の具体的な事例を出発点として、世界に豊かさや貧困をうみだす構造と、個々の場所をつくり変えてゆくさまざまな試みについて、学生の皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。何よりも住み込み調査の楽しさや、現場から発想することの大切さ、異なる思考を架橋するスリルについて少しでも伝えられたらと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

(2009年4月26日原稿受理)

## ◎ 教職員人事異動

### 小島啓重事務長

国際学部事務部事務長の小島啓重さんが3月31日付で定年退職されました。事務長は国際学部には1年間在籍されていました。裏方として国際学研究科・国際学部の事務を円滑に、かつ前進的に采配されてこられました。在籍期間中は本当にお疲れ様でした。後任には、放送大学栃木学習センターから品川昇事務長が着任されました。

## \* 『HANDS—とちぎ多文化共生教育通信』のお知らせ

2007年9月20日に、ニュースレター『HANDS』第1号が発行された後のニュース発行についてお知らせします。

### 第6号(2009年4月6日)

「外国人の子どもの教科学習と学級担任の役割」東京学芸大学国際教育センター 臼井智美

「外国人児童生徒在籍校調査報告会」に参加して

名古屋大学大学院国際言語文化研究科 川口直巳

「栃木県の小・中・高・特別支援学校における外国人児童生徒在籍状況」

宇都宮大学 丸山剛史

「栃木県外国人児童生徒在籍校調査」について」宇都宮大学多文化公共圏センター 矢部 昭仁

## ◎ 掲載記事紹介

1. まろにえ(平成21年3月発行)の9頁にある「留学生からの声」コーナーで、李雪玉さんが執筆した原稿が「日本留学での成長」として掲載されました。

## ◎ 新刊案内

本年3月に、宇都宮大学国際学部多文化公共圏センター(CMPS)から創刊号の年報が刊行されました。主な目次は以下の通りです。「はじめ」では、田巻松雄センター長、渡邊直樹副センター長、重田康博副センター長の挨拶文が寄稿されました。「I 活動報告」では、1 オープニングセレモニー、2 連続シンポジウム VOL.1、3 国際シンポジウム、4 連続市民講座 VOL.1、5 連続市民講座 VOL.2 が簡潔にまとめられています。「II 多文化公共圏センター開設にあたって」ではポルトガル語の非常勤講師であり、また研究員である若林秀樹氏と原田真理子氏の寄稿文がよせられ、今春修了された同窓生でもある茨城県メサ・フレンドシップ副代表の根本久美子さんの文章が掲載されています。最後に、「III 関連資料」を含めた140頁のものです。

**研究室訪問 21・22** 第9号から国際学研究科に関する内外の先生方に寄稿をお願いし

たコーナーを設けました。今春退官されたお二人、第 21 回には、国際文化交流研究講座の柏瀬省五先生と、第 22 回目に地球社会形成研究講座の片桐雅義先生にお願いしました。

## 「修士論文作成上のチェックポイント」

柏瀬省五

大学院生にとって、入学時から修了時まで最大の関心事は、納得のゆく修士論文を期限内に作成し、余裕をもって提出し、学位授与式では、胸を張って学位が受けとれることだと思います。指導教員にとっては、毎年年度末に、その成果を審査し、合否を決める作業が、実のところ、年間で最も辛く苦しく悩ましい仕事です。

日常の大学院生の論文作成指導、中間発表、提出された修士論文の審査作業、そして、論文提出後の最終発表会を通して、私が常々感じていることは、「大学院生は、修士論文を書く意味をちゃんとわかっているのかなあ」という実に素朴で基本的な感想です。

私は、次のような「修士論文作成上のチェックポイント」を自分の指導生に、毎年印刷して、年度始めに渡してきました。【学部の学生には「卒業論文作成上のチェックポイント」】それでも毎年、提出された論文を読むたびに、学生は、論文作成の意味を、ちゃんと理解してない感じが残りました。私は、3月一杯で定年退職しました。ので、もうみなさんにこれを渡すことがありません。そこで、以下に、その「柏瀬ゼミの論文作成上のチェックポイント」を、多少の補足説明を加えて、みなさんに「置きみやげ」に公開します。これから修士論文を作成する人、是非一読して参考にしてください。

### 修士論文作成上のチェックポイント

#### 1. 社会の発展に貢献するか（題目は適切か）

あなたの論文は、人類の進歩、社会の発展に貢献するか。論文の動機、目的、内容、姿勢が、社会貢献を目指しているか。あなたの論文が、社会を混乱させたり、犯罪を増やしたり、悪者を助長させる情報提供や結果になることは許されない。そのような学位論文は提出できない。

#### 2. 研究の成果を踏まえた健全な主張をしているか（内容が適切か）

あなたの論文は、読者にどのような印象を与えるか。あなたの論文は、読者に、〇〇を学んだ、〇〇を教えられた、〇〇の感動を得た、という印象を与えること。

多くの先生方から研究領域における「先行研究の参照」が奨励されています。それは必須であり当然のことですが、しばしば「先行研究の紹介」「先行研究の要約」で終わっている論文を見かけます。それでは「先行研究より劣る」わけですから、「学位請求論文」とし

ては、不足です。私がしばしば「論文はレポートではない」というのは、そういう意味です。最近、しばしば、先生方の中で、「先行研究の剽窃」「先行研究の模造」が、話題になります。みなさんは、先行研究より一歩でも二歩でも先に進める論文を書くこと。独創的な論文が期待されています。

### 3. 問題点の整理、資料の整理、理論の整理、主張の整理ができているか（論文全体がバランスよく構成されているか）

論文・研究の動機(前書き、はしがき)、論文・研究の目的、主張の前提、現状の把握、問題点の提示、問題点の分析、議論の展開、異論、反論に対する備え、結論等、論文全体がバランスよく構成されているか。関係資料、補足、参考文献、参考意見等の紹介が過不足なく提示されていること。

みなさんの悪い論文の特徴は、

- (1) 論文の目標、主張が曖昧で、行き当たりばったりの構成、論述が目立つ。
- (2) 先行研究の理解が不十分。場合によっては誤解している例が目立つ。
- (3) 現状や問題点の理解不足、分析不足、誤解がある。従って、問題解決の方向が迷走している。
- (4) 客観性を失い、自分の主張に夢中になり、独善的論理の展開が目立つ。
- (5) 異論、反論に備える態度が不足。別な見方、考え方、解決法への配慮に欠ける。

### 4. 論述の形式・表現が、内容に照らして明快で、読者に判り易く記述されているか（論述形式・表現・文体が判り易いか）

論述に矛盾がなく、主張が首尾一貫しているか。論述の形式に強弱のバランスがとれているか。段落、文体、主語、述語の選択に細心の注意が払われているか。語の選択が適切で、誤字、脱字の見落としがないよう校正されていること。

### 5. 論文作成のマナーを守っているか（論述の態度が正しいか）

異論、反論、不備に対する備えができているか。別の見方、考え方、誤解が予想される時は、その点を特に丁寧に説明する。自分の主張と他人の主張を混同しない。そのために、引用符号、註、括弧等を適宜使用すること。

\*あなたの努力が正当に評価される論文を書こう！

(2009年4月2日原稿受理)

「行動心理学的人間感」

(これは、2月19日に行った最終講義をもとにしたものです。)

様々な分野の研究者が集まっている国際学部には所属していると、考え方の違いの背景にそれぞれの研究領域の発想のし方があると感じます。私の考え方、人間感にも、行動心理学が大きな影響を与えています。行動心理学とはどのような学問か、その考え方、人間感とはどのようなものかをお話したいと思います。

#### ◇行動心理学とは何か

近代心理学発祥の記念すべき年として、ヴントが心理学実験室をライプチヒ大学に創設した1879年があげられます。それまで、「心」については哲学者が思索によって探求してきました。それに対して、ヴントは心を実証的に探求しようとしていました。しかし、彼が採用した方法は現在からみれば不思議なものです。彼は、実証的な心理学のためには観察・実験が必要だと考えました。その観察の対象として「他者の心」は不可能です。そこで、ヴントは観察の対象を自分の心(意識)であるとしたのです。

ここで、大きな問題が生じました。二人の研究者の観察の結果が異なった時、どちらが正しいか決めようがないのです。この問題を解決するために現れたのが行動主義の心理学です。ワトソンが「行動主義」について講演を行った1912年が記念すべき年です。彼は、心理学の対象は心ではなく行動であるとしていました。そうすれば、客観的な研究が可能となります。彼の行動主義はきわめて厳格なものでした。心、意識などをにおわせるものを極力排除し、筋肉や腺の働きを行動として研究の対象とすべきだということです。この行動主義が心理学にもたらした非常に大きな貢献があります。それは、言葉をしゃべることができない赤ちゃんやさまざまな障害を持っている人も心理学の対象になるということです。ヴントの方法では、これらの人々は心理学の対象にはなり得ません。

スキナーはワトソンの後を受けた厳格な行動主義(radical behaviorism)者です。スキナーは自発的な行動の学習を重視しました。この学習の基本原理は「快」です。行動主義者が「快」というのはおかしいと思われるかもしれませんが、神経生理学の進歩のおかげで、「快」について客観的に語るできるようになったのです。

#### ◇行動心理学的人間感

行動心理学の考え方、人間感の特徴として第一にあげられるのは、環境要因の重視です。遺伝的要因を無視するわけではありませんが、環境要因の方がずっと大きな影響力を持っていると考えます。例えば、凶悪犯罪を行う人は、そのように遺伝的に生まれついているのではなく、環境的要因によってそのような行動をするようになってしまったのだと考えるのです。逆に言えば、適切な環境が整えられていれば、そのような行動はしなくてすんだということです。

環境要因の中で重要なのは、前にも述べた「快」をもたらすものです。それは、「ごほうび」であったり、「賞賛」であったりします。ある行動が行われたときに、賞賛が与えられれば、その行動は増えます。そのようにして人間の行動を変化させることができます。だから、行動心理学者は「ほめて育てる」ことを重視します。ほめてばかりいたらつけあがるとか、そんなにほめることがない、という反論がすぐに聞こえてきそうですが、「ほめて育てる」というのは何でもほめるということではないのです。行動心理学の非常に重要なテクニックに「漸次接近法」(反応形成法)があります。これは、賞を与える基準を最初は低く、次第に高くしていくことによって、最初は不可能と思われるような行動までも形成する方法です。「ほめて育てる」ときにもこれと同じ考え方が必要です。なんでもほめるのではなく、より良い行動が生じたとき、進歩が見られたときに、すかさずほめるのです。

このような考え方をとる行動心理学者は、人を見るときに「良いところ」をみようとする傾向があります。悪いところを見つけるだけでは、その人の行動を変えることにつながりません。その人のよいところをみつけて、それに反応することによって、その人の行動がさらによい方向に変化すると考えるからです。

もうひとつの特徴は、ものごとをできるだけ具体的に考えることです。例えば、「モラルを高めよう」という表現は行動心理学者が最も嫌う表現です。それを唱えても人々の「モラル」が高まるとは考えられないからです。もしゴミの分別をより徹底したいのなら、分別のし方をどうしたら周知徹底できるか、分別して出しやすい方法はないか、など具体的なことを考えないと意味がないのです。

このような考え方の傾向を持っている私は、これまでのあらゆる経験が価値のあるものであると思っています。私のこれまでの人生は、ラッキーなものでした。そして、これから先の人生もラッキーなものであることを期待しています。

(2009年4月20日原稿受理)

**博士録 06** 第 22 号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第 6 回目には今春入学された博士後期課程の 3 期生にお願いしました。

氏名：**今井淳雄** (いまい あつお)

出身大学院：宇都宮大学大学院 国際学研究科 国際交流研究専攻

専門：社会学、公共政策

所属研究室：松金研究室

趣味：漫才を見ること

研究テーマ：中国の非営利セクターの機能変化について

自己紹介：修士課程を修了して 2 年が経ち、再び戻ってまいりました。仕事をしながらの研究ですので不安もありますが、仕事での経験も活かしながら頑張ってまいりますので、

みなさんどうぞ、よろしくお願いいたします。

(2009年4月26日原稿受理)

氏名：**崔 寶允** (チェ ボユン)

出身大学院：宇都宮大学大学院 国際学研究科 博士前期課程

専門：国際学

所属研究室：佐々木史郎研究室

趣味：読書、ダンス

研究テーマ：韓国社会の日本文化 ―日本文化受容の変遷―

自己紹介：はじめまして。チェ ボユンと申します。韓国のソウル出身です。

韓国の祥明大学で日本語教育を専攻し、学部生のときは「日本語・日本文化研修生」としてお茶の水女子大学で1年間留学しました。大学を卒業した後、外国と異文化に対する視野をもっと広げたいと思い、姉妹校である宇都宮大学の国際学研究科に進学しました。現在も引き続き国際学研究科の博士後期課程で研究を進めています。

韓国は、世界一日本語学習の国です。とりわけ、高校で行われている第2外国語授業での日本語科目の選択率は非常に高いです。なお、現行の日本語教科書には初めて日本文化に関する記述が掲載されました。修士論文では、日本語を学習している高校生たちが教科書の日本文化についてどのように認識しているかを書きました。その結果、多くの高校生が教科書より実生活の中で日本文化に触れていて、特に日本の大衆文化に興味が高いことが分かりました。これは1998年韓国で実施された「日本の大衆文化開放政策」の影響であると思われます。

博士論文では、上の「日本の大衆文化開放政策」を手がかりに政策実施から今まで約10年間の日・韓国における相互認識の変化について研究するつもりです。対象はこの政策の影響を受けた世代である10代から20代の若者です。

頑張りますのでどうぞよろしくお願いいたします。

(2009年4月27日原稿受理)

氏名：**仲田和正** (なかだ かずまさ)

出身大学院：宇都宮大学大学院 国際学研究科 博士前期課程

専門：国際緊急援助、国際協力・貢献論

所属研究室：田巻研究室

趣味：陶芸（穴窯焼成）・ドライブ（サーキット走行）

研究テーマ：国際援助行政と貧困削減

自己紹介：皆様こんにちは。ヘアデザイナーをしております仲田和正と申します。現在は、株式会社ヘッドクリエーション代表取締役として職業奉仕に従事しながら、フィリピンNGO法人の日本代表を務め、国際奉仕活動を行なっています。又、財団法人ボーイスカウト日本連盟の団委員として、青少年育成プログラムなどの社会奉仕活動にも関わっており

ます。

1972年に渡米し、ヘアデザイナーとしての第一歩は、憧れの地ビバリーヒルズのサロンでした。同時期、米国のREDKEN研究所でBeauty Through Scienceの美容哲学を学びました。

1977年にヘッドクリエーションを創設。REDKENのInternational Performing Artistに就任し、世界各国でヘアショーや講演活動を行ないました。

1991年、国際ロータリーの地区国際奉仕委員をしていた私は、ピナトゥボ火山の大噴火直後に被災地域より人道的な緊急支援要請を受け、世界社会奉仕活動に参加する。

これを機に国際協力や貢献への関心は深まり、現地NGO法人の設立メンバーとなる。

実践者として18年間に亘り、HAVEN（幼女売春を強要された子供達の収容施設）の支援や図書館の設立（未就学児童の教育支援）など、ピナトゥボ火山噴火災害地域の抱える様々な課題と向き合うなかで、援助政策や実施体制に対する問題意識を深めていきました。

博士後期課程進学へのモチベーションは、アドミッションポリシーが求める学生像に触発され、APPLEのCEO スティーブ・ジョブズがスタンフォード大学学位授与式の祝賀スピーチで、最後に残したメッセージ、STAY HUNGRY, STAY FOOLISHによって、確実なものとなりました。

著書 『クリニックカット&パーム』1983年（理美容教育出版社）

『クリニックサロン』、『スタッフ・トレーニング』各テキスト監修（REDKEN社）

MASTERS *A Personal Journey to Success* Audio tape 1996（Masters社）

（2009年4月12日原稿受理）

氏名：芦 晓博（ロ ギョウハク）

出身大学院：宇都宮大学大学院 国際研究科 博士前期課程

専門：日本語教育

所属研究室：梅木研究室

趣味：現在は、日本で大人気のクイズ番組です。

研究テーマ：

中国の「大学日本語」の学習者の聴解に関わる日本語の音声的要素に関する研究

一話し言葉における音声的特徴を中心に一

自己紹介：私は中国の大連大連語学院大学で四年間日本語を専攻し、大学を卒業した後、大学で一年間日本語教師として勤めたことがあります。すなわち、私は日本語教育の対象から日本語教育を施す側になって、自分自身の日本語教育に関する知識が足りないと感じながら、学習者の聴解力が他の3技能より劣っているように思いました。

その学習者の聴解教育の問題を改善するために、日本に留学に来て、2007年4月から宇都宮大学大学院・国際学研究科に進学しました。その2年間では、日本語教育の知識を蓄えるだけでなく、常に批判的な意識を持ち、研究者としての視野も広げられました。修士

論文では、中国の「大学日本語」の学習者の聴解教育の問題点を指摘し、改善案を提案しました。

今年の4月、宇都宮大学大学院・国際学研究科・博士後期課程に入学させていただき、今までの研究に続く、その学習者の聴解力に影響を及ぼす日本語の音声的要素を課題として挙げておきたいと考えています。

(2009年4月24日原稿受理)

**知究人 10** 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。第30号の第10回目は執筆者の選任ができませんでしたので、次号以降に掲載を見送ります。

**海外だより 04** 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、海外在住者の積極的な情報提供を事務局にお寄せ下さい。今回は、中国・大連でご活躍の丁研究室OGの李善英さんをお願いしました。

### 「教師の道を目指して」

李善英

国際学研究科および国際学部の皆様、お久しぶりです。

国際学研究科国際文化研究専攻の李善英です。私は2005年3月に修了して5月の末頃大連に戻りました。大連に戻ってから大学の教師を目指していくつかの大学に応募しましたが、現実は厳しかったです。中国はもう何年前と違って、日本で修士号の資格を取った人は多く、大学でも先生の経験があつて、高い学歴の人を求めています。私は先生の経験は一度もなかったもので、書類審査でもうすでに不合格でした。仕方なく、大連のある日本の会社に面接を受けて勤めることになりました。2007年8月、私は友達の紹介から大連の開発区にある東北大学大連芸術学院に面接を受けてみました。見事に合格でき、現在は日本語の先生として働いています。

それでは、まず、私が所属している大学を簡単にご紹介させていただきます。大学の名前通り音楽、美術といった芸術の方面がメインで、九つの学部があつて、その中に、大学の名前に相応しくない国際ビジネス学部があつて、英語、日本語、イタリア語、韓国語などの学科が設置されています。イタリア語と韓国語は短期の3年制で、英語と日本語は本科の4年制です。全校の学生数は約7000人で、先生は500人ほどいます。日本語学科について簡単にご紹介します。日本語学科には私を含めて6人の先生がいます。みんなそれぞれの科目を担当しています。私は授業が毎週平均20コマあつて、毎日結構ハードなスケジュールです。授業科目は基礎日本語、聞き取り、文法、会話、ビジネス日本語、日本文学などいろいろあります。学生たちは「あいうえお」も知らない状態から日本語の勉強を始めていますが、卒業する頃になると日本語が結構うまくなります。

先生の経験がなかった私は初めほんとうに大変でした。初めの一年間は、毎朝 5 時半に起きて、夜は授業準備、昼は授業という形であまり遊ぶ時間もなしに熱中しました。しかし、今年は、去年と違って気持ちに余裕ができました。つまり、去年は授業のとき緊張感があったり、教科書の内容をどのように教えるか迷ったりしたが、今年はその面で全然違う感じでした。授業の時も前より落ち着いているし、教え方も上手になったような気がします。それで、前は先生って大変な仕事だね、と自分一人で溜め息をついたりしたんですが、今は、うん、これでやっていけるかもと一人喜んでいます。授業のとき、私は日本での勉強や生活の経験を生かして、学生たちに日本の文化や日本の社会について話したりします。学生たちはとても興味深く聞いて、質問したりします。其のたびに私は日本のことを正しく伝えようと努めています。

日本での 4 年ぐらいの留学生活は私にとって人生の転機点になったと思います。今、大学の教師になったのも日本での留学があったからです。以前、何をしてやっていくかと迷っていたんですが、今やっと目標が見えたような気がします。こんな意味で私は私の指導教師であった丁 貴連先生に遅いながら感謝の気持ちを表します。なぜかと言いますと、私は正直に言って丁先生の厳しさのおかげで修士論文を最後まで書くことが出来たと思っていますからです。そのときを振り返ってみますと、毎日アルバイトに夢中になって、ゼミをさぼったり、自分のレポートの発表のときは、急いでどこかで写した内容を持って行ったり、それで、その場で先生に厳しく言われて、恥ずかしくて顔が真っ赤になったりしたことが何度もあったんです。其のたび先生に厳しく言われて、始めは「先生は厳しすぎる」と心の中で思っていたが、先生は私だけじゃなく同じゼミのほかの学生にも同じく厳しかったので、先生の厳しさが理解できてもっと頑張るようになったのです。先生のゼミを通じて、私は論文の書き方、また先生の学問に対しての情熱などを覚えました。修論を無事円満に発表できたとき、いつも厳しくてがんばり屋だった先生目から溢れた涙は、学生に対する先生の愛でした。このような覚えは、今の私の精神上的の糧になって励ましてくれています。

日本での 4 年余りの留学中、私は、日本人の仕事に対する真面目さ、相手に助けを求めたら快く助けてくれる日本人の温かい気持ち、また、日本のきれいな景色、等などからたくさん感動を覚えました。だから、私はこれからもその感動を忘れることなく、自分の人生の道でさらに花を咲かせて行こうと思います。

(2009 年 4 月 20 日原稿受理)

(国際学研究科 国際文化研究専攻 第 4 期修了生)

---

**編集後記：**限られた時間でのニュース発行、同窓生の皆さんのご感想はいかがでしたか？ぜひ、今後の紙面に反映させていきたいと思っておりますので、メールを下さい。また、皆さんの記事も受け付けますので、近況報告や研究報告などさまざまな情報をお寄せいただければ幸いです。 **同窓会会員の皆様へお願い：**住所、勤務先およびメールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。 [chikyukai@yahoogroups.jp](mailto:chikyukai@yahoogroups.jp)

---

宇都宮大学大学院国際学研究科同窓会